

## J. J. Rousseau (1762) ÉMILE OU DE L'ÉDUCATION

### 第三編 その一

人間の弱さはどこから生じるか。その力と欲望のあいだにみられる不平等から生じるのだ。わたしたちを弱いものにするのはわたしたちの情念なのだ。それを満足させるには自然がわたしたちににあたえている以上の力が必要となるからだ。だから欲情をへらせばいい。そうすれば力がふえたのと同じことになる。望むことよりも多くのことができる者は余分の力をもつことになる。その人はたしかにきわめて強い存在だ。これが子ども時代の第三の状態であり、わたしがこれからそれについて語らなければならない。(p.283)

人間の知性には限界がある。そしてひとりの人間はいっさいのことを知るわけにはいかないばかりでなく、ほかの人間が知っているすこしばかりのことを完全に知りつくすこともできない。まちがった命題の一つ一つに対立する命題はすべて正しいのだから、真理の数は誤謬の数と同じように無限にある。だから、学ぶのに適当な時期を選ばなければならないのと同じように、学ぶことも選ばなければならない。(p.286)

あなたがたの生徒の注意を自然現象にむけさせるがいい。やがてかれは好奇心をもつようになるだろう。しかし、好奇心をはぐくむにはけっしていそいでそれをみだしてやっちはいけない。かれの能力にふさわしいいろいろな問題を出して、それを自分で解かせるがいい。なにごとも、あなたが教えたからではなく、自分で理解したからこそ知っている、というふうにしなければならない。かれは学問を学びとるのではなく、それをつくりださなければならない。(p.289)

わたしたちは聖ヨハネの日(6月24日)に日の出を見た。わたしたちはクリスマスか、それともほかの晴れた冬の日にもたまたま日の出を見に行く。(中略) わたしはこの第二回目の観察も第一回目のときと同じ場所で行なうようにする。そして、注意を呼び起こすために、なにかうまい方法をつかって、わたしたちのどちらかがこんなことを叫ばずにはいられないようにする。おや、おかしなことがあるものだ。太陽はもう同じところから昇ってこない。こちらがわたしたちのまえに見たところだ。ところが、いまではあそこに昇った…結局、夏太陽が昇る方向と冬太陽が昇る方向とがあることになる…。若き教師よ、これがあなたの行くべき道だ。こうした例証だけで十分にあなたは、世界を世界として、太陽を太陽として、きわめて明快に天体運動について教えることができるはずだ。(p.294)

問題は土地の地形を正確に知ることではなくて、それを知る手段を知ることなのだ。地図が頭のなかにはいつているかどうかはどうでもいいことなので、地図があらわしているものを十分によく理解していれば、そして、地図をつくるのに必要な技術について明確な観念をもっていればそれでいいのだ。(中略) あなたがたの生徒は地図を知っているが、わたしの生徒は地図をつくるのだ。ここで部屋がまた新しいもので飾られることになる。

わたしの教育の精神は子どもにたくさんを教えることではなく、正確で明瞭な観念のほかにはなに一つかれの頭脳にはいりこませないことにある、ということをつつと忘れないでいただきたい。たとえかれがなに一つ知らなくても、わたしはかまわない。ただかれがまちがったことを覚えるようなことさえしなければそれでいい。そしてわたしがかれの頭のなかに真理をおいてやるのは、ただ、真理のかわりに覚えこむかもしれない誤謬からかれをまもってやるためなのだ。(p.297)

やすらかな知性の時期はひじょうに短く、たちまちに過ぎ去っていき、この時期にはほかにもいろいろとしなければならないことがあるのだから、子どもを物知りにすることができればそれで十分と考えるのは愚かなことだ。子どもに学問を教えることが問題なのではなく、学問を愛する趣味をあたえ、この趣味がもっと発達したときにまなぶための方法を教えることが問題なのだ。これこそたしかに、あらゆるよい教育の根本原則だ。(p.298)